

<b>Title</b>	癒しの教会形成 : 教会の働きを「牧会ケアモデル」で考える
<b>Author(s)</b>	窪寺, 俊之
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学 : 論集, Volume27, 2012.3 : 200-220
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3904">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3904</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 癒しの教会形成

——教会の働きを「牧会ケアモデル」で考える——

窪 寺 俊 之

### 一 今日の社会状況と求められる「癒しの教会」

私は人間の心に関心があり、長年牧会カウンセリングやスピリチュアルケア（霊的ケア）について研究してきました。具体的に申しますと、今日、教会員はもちろん、牧師の中にも、仕事のストレスや家族の抱える問題、あるいは教会員とのトラブルの心労のためにカウンセラーや精神科医の助けを求める人が出ています。信仰があっても、自分の心をコントロールできなくなったり、心の病に罹ったりします。また、大変信仰深い立派な先生のお子さんが、非行に走ったり、不登校になったり、自殺したりして、心を痛めることがあります。私はそんな人間の姿を見て、人間が「健やかに生きる」とはどういうことか、あるいはキリスト教の「福音」と心の「癒し」とはどんな関係にあるのかなどと考えたりします。

そこで今日は、教会の働きを牧会的ケアの視点から見て「癒しの教会」とは何かというテーマで考えてみたいと思います。

「癒し」とは、いくつもの意味があります。肉体的病気から健康を「回復」するという意味もありますし、人と人との人間関係の「和解」という意味もありますし、神様への「悔い改め」も霊的癒しです。「癒し」とは、「回復、和解、悔い改め」を意味すると言えます。私たちクリスチャンはしばしば霊的癒しを問題にします。しかし、今日の私たちの抱えている問題は、霊的癒し $\parallel$ 救いだけですべての問題が解決するというわけにはいかないほどに複雑化しています。人が健康に過ぐすには、非常に総合した形での「癒し」が必要になると考えます。

私たちの周りには心身霊ともに病んで「癒し」を求めている方がたくさんおられます。身体を壊し、仕事を失い、家族から見放され、自分自身を持って余ってしまった人もいます。そういう人たちが、生きる力を求めて教会に足を運んでいきます。厳しい人生を負い切れなくなつて、生きる意味を失い、不安にとらわれて苦しんでいます。精神科医やカウンセラーの助けを受けているクリスチャンをたくさん知っています。

それでは、今日、教会はどうしたら「癒しの教会」になれるのか、を考えてみたいと思います。

## 二 初代教会にみる二つの働き

私は使徒言行録六章一―七節の中からそのヒントを得たいと考えます。

初代教会には、海外で生まれ育ったギリシャ語を話す人たちが海外から戻つて来て加わっていました。母国であるエルサレムに帰つて来て老後を過ごす人がいたようです。そのような人が初代の教会の仲間に段々増えてきましたが、ヘブライ語を自由に話すユダヤ人のように日常生活が上手いかなかったようです。「日々の分配のことで、

仲間のやもめたちが軽んじられていたからである」(一節)とあります。へブライ語を自由に話せないために食事の分配のことで不満が出てきました。配偶者を失った高齢者が自分の意思を十分に伝えることができなかつたのでしよう。毎日の食事のことで公平に扱われていないという不満がありました。その不満を知つた仲間のユダヤ人が代わつて苦情を使徒たちに伝えてくれたようです。仲間のやもめたちの窮状を知つて声をあげたのは、やもめたちへの愛があつたからです。

使徒たちで食事の世話をするには多過ぎる人たちが、初代教会には加わつてきたのです。身寄りのない高齢者の苦情が出たとき、使徒たちはそれをしっかりと受け止めて、解決の方法を模索しました。その方法は、「兄弟たち、あなたがたの中から、<sup>②</sup>霊と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう」(三節)とある通りです。ステファノ、フィリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、ニコライの七人を選んで食事の奉仕にあたらせたのです。<sup>③</sup>この時の人選で重要なことは、霊に満ち、知恵があり、評判の良い人であつたことです。「霊に満ち」とは、神のみ心を求め忠実に神様の意思を行う人であつたこと<sup>④</sup>です。また、「知恵に満ち」とは、霊的知恵に加えて具体的問題解決の方法に通じている人です。そして、「評判の良い人」です。それは、ギリシャ語しか話せず生活上も精神的にも困っている高齢者の訴えにも、その人の立場に立つて忍耐強く丁寧に耳を傾けて聴く人でした。相手の立場に立つて親身になつて考えてくれる人だつたと想像できます。このような態度で接したので仲間の内で評判が良かったと想像できます。

このように人々への配慮に初代教会は満ちていたのです。

ステファノたちを選んで、食事担当の幹事に任命し、使徒たちは「祈りと御言葉の奉仕に専念した」（四節）のです。ここには、教会のあるべき姿が記されているように思います。第一は、「祈りとみ言葉の奉仕です」。第二は、「日常生活に困った人たちへの奉仕です」。初代教会はこの二つの働きを両立させたのです。その結果、「こうして、神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った」（七節）とあります。

このように食事担当の幹事を選び、任命した理由は、「神の言葉がないがしろにされないため」です（二節）。使徒たちが神の言葉を語るには、食事に時間を取られてはならないのです。み言葉を語るためには、食事当番が必要でした。食事の奉仕は、み言葉の奉仕と同じくらいに重要な奉仕だったのです。特に、ステファノのような「霊」と知恵に満ちた評判の良い人が選ばれたことで、使徒たちは本来の務めである「祈りと御言葉の奉仕」（四節）に専念できたのです。その結果、初代教会は「神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った」（七節）ということになったのです。

ここで私が注目したいことは、「神の言葉を語ること」と、「日常生活の必要に応える奉仕」の関係です。日常生活の必要にしっかりと応える奉仕と、神の言葉を語る務めが対立したり、二者択一的に考えるべきものではないと思います<sup>⑤</sup>。神の言葉を語り、日常生活の必要に応えることは、両方必要なことでした。神の言葉を語ることは、神の愛を語ることであり、日常生活の必要に応える業は神様の愛を具体的に伝えることでした。「人々の日常生活の必要に応える」業が証しになったのです。この二つのことは二つのことであって同時に一つのことです。愛の実践を通して神の愛が証しされ、神の言葉が生きたものとなることです。愛の業があつて神の愛が真実なこととして伝

わったわけ<sup>⑥</sup>です。

神の愛の真実が貧しい人への働きを通して証しされたということは、次の「祭司も大勢この信仰に入った」（七節）という聖書の言葉にも現れています。「祭司も大勢」使徒たちの仲間に加わっていった理由を考えたいと思います。祭司たちは、特別ユダヤ社会を支えるユダヤ教の中核にいた人たちで、知的エリートたちです。ユダヤ教の中心にある神殿礼拝を司るのは大祭司ですから、社会構造の中での祭司たちの立場は不動のもので、生活の保障、社会的地位、社会的尊敬を得ていた人たちです。その人たちが何故あえて漁師や素性もよく分からないクリスチャンの仲間に加わったのでしょうか。初代教会員の中に経済的に裕福な人が多かつたとか、この世の知者が多かつたとは考えられません。<sup>⑦</sup>この祭司たちは簡単に宗旨を変える人たちではありません。彼らは理論武装をしっかりとっていた人です。彼らの宗教的伝統に固執していたのです。だから、新しい宗教集団であるクリスチャンたちが姿を現して来たとき、一番敏感に反応し、自分たちの地位が揺れ動いたのを感じたのは祭司たち自身です。宗教的心情が強くあつたから、伝統的ユダヤ教に従わない人への怒りはイエス様を十字架に架けるまでに強かつたのです。

その祭司が大勢、クリスチャンの仲間に加わつたことが私には大変不思議に思えます。何故でしょうか。祭司がクリスチャンの仲間に加わつたのは、クリスチャンたちの共同体の中に弱い者たちが生きる場を見つけて生きていた事実<sup>⑧</sup>に祭司たちが驚いたからだと思います。学歴も社会的地位もない者たちが神様のいのちによって造りかえられて、今度は海外から戻つた貧しい者たちを支えている事実。このことに祭司たちも少なくとも心を動かしたと想像できます。初代のクリスチャンたちの中に神の霊に動かされた愛があり、クリスチャンたちの生き方こそ本来の自分たちが求めていたものだ<sup>⑨</sup>と祭司たちは実感したのでしょう。信徒たちの働きの中に聖霊に突き動かされた愛が

生きていたのです。弱い人たちの痛みや苦しみを共に担う愛があったので、それを見た祭司たちもその仲間に加わりたいと考えたのです。そう考えることの方が自然です。初代のクリスチャンの内に働く聖霊のいのちが、愛の業を可能にし、語った言葉に力を与えたとと言えるでしょう。<sup>8)</sup>

使徒言行録第六章一―七節を見ると、初代教会は「み言葉を伝えること」と「弱い人たちへの愛のわざ」が一緒になって具体化されていたことが分かります。この二つの働きを同時にできたのは神の霊的いのちがクリスチャンの交わりに溢れていたからです。初代教会を形成した漁師だったり、社会の底辺にあった人たちであるにもかかわらず、神の愛によって造りかえられて、今度は海外から戻った人を支える力が与えられたのです。弱い人の気持ちをしっかりと汲み取る忍耐と感性が与えられたのです。それだけではなしに弱さや痛みをもつ人々と共に苦しみを負う勇気が与えられたと言えるでしょう。癒しの教会形成のためには「牧会」は不可欠で、ニコデモのような霊的で心の配慮のできる人が不可欠だったと教えられます。神の言葉を生きた言葉として一人一人に伝えるのが牧会だと思います。届けられた神のことばは人を生かしていきます。

### 三 牧会ケアモデル

癒しの教会形成を考えると、重要になるのは「ケア」care、配慮という概念です。

#### 1 ケアの意味

「ケア」は牧師の働きでは大きな意味をもっています。「ケア」とは、一般的意味は名詞では配慮です。この「ケア」careには動詞もあります。次のような二つの意味があります。第一は、「ケア」は弱者や傷ついた人を「配慮する、看護する、世話する、面倒をみる、管理する、気をつける」ことを意味します。第二は、「気になる、気をもむ、心を痛める、心配する」です。この二つの意味には大きな差があります。第一の意味の「世話する」という意味では、世話する人と世話される人は、立場に上下関係が生じます。ところが第二の意味は「心を痛める」では、ケアする人自身が心を痛め、気をもむのです。ケアする人も、ケアされる人も同じ経験を共有しています。この苦しみや痛みを共有する点では、同じ立場に立っていることになります。この同じ立場に立つという点に「ケアの本質」があると考えられます。

「ケア」を「苦しみや痛みを共有する」と理解すると、ケアされる人の弱さへの感性、思いやり、人間的温かさ、寛容性が大切になるのです。

## 2 ケアとキュアの比較

「ケア」careがもつ本当の意味は、医療の中ではしばしば「キュア」cureと比較して用いられてきました。「キュア」は治療する、積極的に病気を治すことを意味します。「キュア」には、「知識や技術」が必要ですが、「ケア」には、「知恵」が必要です。<sup>9</sup> ケアには相手に対する人格的優しさが必要なのです。しばしば倫理的問題になるのですが、終末期がん患者で治療しても治療効果が望めない人に対しても現代医療は過剰な延命治療（キュア）を施してきました。そのために患者はただ苦しむだけになることもあります。それに対して「ケア」は病気の治療は控えて、病人自身の心を含めた全存在を支えることに努力します。この二つの言葉を比べると、「キュア」は疾患の治療を積極



的にすることですが、「ケア」は直接病気を治療はしません。しかし、病人自身の心や魂を支えて、生きる希望を支えます。ケアには援助者自身の生き方、信仰、感性が全体的に関わってきます。

### 3 ケアの強さ

「キユア」治療に対して、「ケア」は「ものたりない弱さ」を感じさせるかもしれませんが。

しかし、実は、傷ついた人や弱い人の世話をすることは、同時にその人の負っている重荷を共に負うことであり、こちら側も傷つく覚悟が必要です。そして、なによりも重荷を共に負う勇氣が必要ですし、さらには自己犠牲の「覚悟」が必要になります。「覚悟」というのは、弱さではなく強さを求めます。自分自身の人生をかける意志的決断が求められますから、むしろ「本当の強さ」が求められるのです。患者に寄り添って共に生きるには、「他者への強さ」「人と戦ってどれだけ強いか」ではなく、「自分への強さ」であり、人間的成熟が求められます。「ケア」は、他者の利益を積極的に求める強さが求められる行為です。自分の利益を求めてはできませんし、自分に執着してはできないことです。自分を明け渡すことですし、捨てることです。信仰的には「自分を捨てることで、強くされる」信仰が求められます<sup>⑩</sup>。一旦自分を捨てて、神の手に委ね切る謙遜と勇氣が求められます。このような謙遜と勇氣をもつことが「ケア」には求められます。

### 4 神様のケア

自分を捨てる時、私たちがケアし、弱さを強さに変えてくださる神の愛に気づきます。神様のケアは、いろいろの状況の中で与えられます。み言葉を学んでいる時に、あるいは、祈りの中で、あるいは教会員との交わりの中

で、あるいは家族訪問や病床訪問の中で与えられます。私たちの疲れた心を癒し、消耗したいのちに新しい力を注いでくださるのです。

私自身は以前、淀川キリスト教病院でチャプレンをしたことがあります。治療しても完治できない終末期のがん患者さんは、孤独と不安、そして死の恐怖に襲われることが多いのです。ホスピスに入院される患者さんの中には、不治の病気になった自分を受け入れられず怒りを周りにぶちまける人がいます。そのような人が言葉に触れ、温かくケアされることで、心を開き、イエス・キリストを救い主として受け入れるケースに出会いました。神様だけが為すことができる奇跡を見せていただき、私自身の心は癒され、信仰が強められました。私の信仰はその神様の業に触れることで強められ、確かなものに変えられたのです。生きて働く神様に私自身がケアされたのです。神様のケアは私の疲れた心を癒し、信仰を強め、神様の業に招かれた喜びを実感させてくださったのです。牧会を通じて神様の働きの現場にいる特権をもったのです。

医療者の知識と技術だけでは傷ついた魂を癒すことは不可能なことです。今日の医療はケアの大切さに気づき始めました。教会にも心の痛みをもつ人が来て、心のケアを求めています。その人自身を温かく受け止めてくださる牧会が必要です。教会員も牧師も癒しの教会が必要です。

#### 四 聖書が示す「教会モデル」の多様性と牧師のセルフ・アイデンティティ

牧師の働きを考える上で、使徒言行録の記述は、私たちに「教会」を考えるモデル（模範、見本）を与えているように見えます<sup>10</sup>。モデルで考える仕方は、自分自身を理解したり、あるいは自分に課せられた働きを理解する上で有益です<sup>11</sup>。ここでは最近出版された本を取り上げて、「教会モデル」を考えてみましょう。

ウイリモンという神学者の著書『牧師——その神学と実践』が翻訳されて出版されました。その中で二一世紀の牧師像を取り上げています<sup>12</sup>。

第二章は「二一世紀の牧師職——そのイメージ」としています。彼は牧会の伝統的理解にしっかりと立ちながらも、その上で二一世紀の牧師のイメージは過去のものとは異なると指摘しています。次のような文章があります。

「キリスト教の牧師職は多面的で多次元的な性格を有している。福音は変化しないが、福音の告知と働きが行なわれるコンテキストは変化するという事実を忘れてはならない」（一〇〇頁）

この文章の中心は「牧師職は多面的で多次元的な性格を有している」と「福音は変化しないが、福音の告知と働きが行なわれるコンテキストは変化する」です。そして次のようにも語っています。

「聖書そのものが、教会のリーダーの豊かな多様性を示唆している。それぞれの世代が、そのリーダーシップのスタイルを生み出す」（二〇〇頁）。

ここでの中心は、「時代がそのリーダーシップのスタイルを生み出す」と「聖書そのものが、教会のリーダーの豊かな多様性を示唆している」です。

ウイリモンが言いたいことは、キリスト教の福音は時代を越えて変わらないが、福音が語られる社会状況や文化状況が変わるので、時代にあったリーダーシップが求められる、ということなのです。

このことは、今日日本の教会が「癒しの教会」を求めていることと重ねてみますと、時代にあったリーダーシップとして、み言葉の真实性を伝えるための牧会の業の実践が必要とされていることを教えているのです。例えば、日本でも牧師やその家族が精神的に疲労して牧師職から離れています。この事実は、教会員にとっても牧師にとっても「癒しの教会」が必要とされていることを示すと言えます。癒しの教会形成は二一世紀の教職の課題だと言えるかもしれませんが、生活の基本的枠組みが変わる中で生きなくてはならない時代、その中で傷つき、自分を失っている人には癒しの教会が求められています。

この点をもう少しお話しします。現代人のニーズに応える役割りとして、ウイリモンは十一の働きをあげています。それは次のようなものです。

(1) 祭司としての牧師——礼拝の指導

- (2) 牧師としての祭司——教会の内実とその文脈としての礼拝
- (3) 聖書解釈者としての牧師——み言葉によって造り上げられる民
- (4) 説教者としての牧師——み言葉のしもべ
- (5) カウンセラーとしての牧師——キリスト教的配慮
- (6) 教師としての牧師——キリスト者の形成
- (7) 伝道者としての牧師——変化を意味するキリスト
- (8) 預言者としての牧師——イエスの名において語る真理
- (9) リーダーとしての牧師——キリスト教的リーダーシップの特異性
- (10) 人格者としての牧師——聖職者の倫理
- (11) 訓練されたキリスト者としての牧師——牧師の職務における一貫性

ウイリモンのこの書物の一つの特徴は牧師の働きの多様性を指摘しながら、それを牧師のアイデンティティの問題として捉えている点ではないかと考えます。ウイリモンが牧師の働きを抽象論として扱うのではなくて、牧師自身の実存的事柄として扱おうとしている点に私は感銘しています。

「牧師という職務のもつとも確実な基礎は……神と教会からの召命において始まり、またそこで終りを告げる」（一四頁）と言っています。「神と教会の召命」というのは、自分の実存的出来事として受け止め、それに人生をかけて応答するという全存在的応答です。

このような全存在をかけた積極的自己意識（セルフ・アイデンティティ）には自分の強さや弱さ、欠点や罪の深さを意識したところから出発します<sup>15</sup>。このようなテーマは今まで召命観、使命感と言われてきたものです<sup>16</sup>。神様が自分を牧師として召し、牧師として立ててくださったという信仰と信頼です。神様の招きに牧師自身が信仰をもつて応えていくことの大切が強調されてきました。このような召命観や使命感の必要性は繰り返し言われても言いすぎることはありません。

しかし、今、少し角度を変えて、セルフ・アイデンティティの問題として語られるには訳があります<sup>17</sup>。本当のセルフ・アイデンティティ＝自己認識には、自分を裸にしてみる勇气が必要です。召命観や使命感には「神様への応答」「神様への献身」が強調されますが、「自分の本当の姿」を見ることには強調点がありません。そのために自分の弱さや欠点に気づかず仮面で弱さを覆い隠したままで神様の使命を果たそうとする過ちが起きているように自われます。自分の弱さを隠した召命観や使命感には危険性があります。歪んだ自己理解は、歪んだ使命感を生み出して、自分の弱さを認めないので、自分を赦すことができない事態を生んでしまいます。

クリスチャンの精神科医平山正実は次のようなことを言っています。

「牧会者が自己防衛的態度に終始しているままでは、（遣された者は）自らの心を自己開示することは難しい<sup>18</sup>」。

自分の弱さを認められない人は、仮面で生きようとしします。それに対して、成熟した人格は弱さや罪の深さを受

けられる柔軟さと謙遜さをもつのです。自分の罪や弱さ、失敗が神様に赦されているという信仰があるので、人々と共有する強さをもつのです。牧師のこの謙遜さが教会員の心を開かせる切っ掛けになるでしょう。そのへりくだった牧師の態度と神様の愛を生きている牧師の生き方に、教会員は救いの素晴らしさを見るでしょう。弱さの多い自分自身が赦されているという自己認識が大切になります。セルフ・アイデンティティというのは、自分の中にある人格の歪みや成長過程で受けた心の傷、また、素直に自己肯定できない自分と正直に向き合い、神様のみ前で受け入れ直す作業です。セルフ・アイデンティティをもつというのは、自分の誕生や生い立ちから自分がどんな影響を受けているかを知っていることです。また、自分の人生の中で悲しみや困難な経験が自分の信仰にどのような影響を与えているかを知っているかがあります。また、職を失い、健康を害し、家族の支えさえ失って鬱状態にいる教会員の人も向き合うことができます。また、職を失い、健康を害し、家族の支えさえ失った高齢者の訴えを聴く心の備えができるのです。このように弱さを含めた牧師のセルフ・アイデンティティをもつことが大切に思います。そこから癒しの教会形成が可能になるように思います。

## 五 癒しの共同体のいのちの豊かさ——牧会ケアモデル

教会員も牧師も痛んでいます。そして、共に癒される教会が求められます。癒しの教会形成には弱さをもつ人たちの心の痛みや苦しみを受け止める感性をもつ必要性に気づかされます。強さのみを強調する者が見失ったものは、労り、配慮、心使い、柔軟さ、寛大さです。そして大切なことは、すべての人には、その人の人生物語（ナラティブ narrative）があり、その物語の中には弱さもあり、挫折もあり、失敗もありますが、その物語の中に神様の物

語があることです。神様の物語とは神様の恩寵の足跡です。神様の恩寵の豊かさがそこにあるのです。私たちはその意味に気づく感性をもつことが大切になってきます。

ここで今日のテーマである「牧会ケアモデル」で教会の働きをまとめてみたいと思います。

## 1 弱さの受容

今日の教会は、教会員の高齢化問題、心の病をもつ人が多くなっています。牧師一人が頑張る教会よりも、牧師もその教会に集って一緒に神の言葉を聴き、神様の言葉によって癒される教会が必要です。それには牧師自身が牧師という過剰な使命感だけに縛られずに、神の前に、弱さをもつ一人の人間であることを認める柔軟さ、謙遜さをもつことです。弱さを認める強さが牧師自身を癒しの場に引き出してくれます。「癒し」は神の為さることです。ガンバリズムの召命観・使命感が牧師を自己防衛的にし、仮面の自分で生きようとさせる不幸が起きてきます。

信仰の共同体である教会は神様の言葉を聴く場であり、神様の愛による癒しの場であり、神様によって押し出される献身の場であり、この世の悪と戦う場であり、神様の栄光を喜ぶ場です。そして、何よりも本当の自分を見つめることのできるどころであり、神様の癒しを経験する場なのです。教会に聖霊の愛が注がれて癒しの教会が生まれます。

## 2 人生物語

社会的、経済的、精神的弱さをもつ人々に対する配慮をしようとしたら、私たちは自分の持ち物を全部売り払っ



て貧しくなり、自分自身が病にならなくてはならないのでしょうか。そうとは思いません。そうではなく、いつも弱い人に注がれている神の眼差しに自分の眼差しを合わせることです。自分の中にも弱さがあり、自分自身も神様の眼差しが必要な者だと認めることです。その上で、神様は弱い人を強くするという希望に自分の信仰を合わせていくことです。弱い人の中で起きている神のいのちの奇跡に心を向けることです。弱い人と自分が同じ立場に立つことで目が開かれ見えてくる神の現実を見ることです。強さの中で生きていた時に追い求めてきた業績、成績、物質的豊かさ、社会的地位の呪縛から解放されて、全く弱い者にも温かい眼差しを与え、いのちを支えてくださる神様のいのちの豊かさに目を留めることです。牧師自身が神様の豊かな恵みに触れて癒されるのです。

### 3 聴く、沈黙、祈り

次に、人間の痛み、苦しみは個人的に異なるので、その人の位置に身を置いて理解する謙虚さが必要です。その人の言葉の意味を本当に理解することは困難なことです。そこで、あえて沈黙し、心を寄せて聴くことが必要です。私自身の自戒を込めてですが、牧師は語るに早く、人の話しを聴くのが苦手です<sup>20</sup>。言葉にならない心の痛みが言葉になるまで忍耐して沈黙するのです。沈黙することが愛なのです。沈黙の中に相手への尊敬と愛を伝えます。

ただ沈黙している時に、実は沈黙の中で祈り続けます。悪の力が無意識の世界に入り込んで教会員を縛り付け、自由を奪っている暗黒の力から解放されるようにと祈ります。沈黙の中で働く聖霊のいのちに教会員を委ねます<sup>21</sup>。いのちを生み出し、奇跡を行う神様へ信仰をもって委ね切ることで、わたしの心にも平安がやってきます。沈黙して相手の言葉に耳を傾けている時、神様を身近に感じます。悩み苦しむ教会員と会う時が毎回、自分の信仰が試される瞬間です。その瞬間に私たちは自分に死んで神によって生かされるしかしかたありません。それが牧会者を成

長らせてくださる神様の訓練です。

#### 4 聖霊の働き

聖霊は私たちに創造的力をくださいます。新しい癒しの共同体の形成には、聖霊の働きが不可欠です。私たち自身でも意識していない心の傷や痛み、無知や高慢の心を癒してくださるのです。新しい共同体は癒しの共同体、み言葉に聴く共同体です。聖霊によって生まれ変わった主の証人として新しい共同体の形成に送り出されるのです。今日の教会は、激しい時代の変化の中に置かれています。新しい共同体にはいろいろな人たちが集ってきます。仕事や家庭に疲れた人、人間不信になった人、文化や価値観の異なる人たちです。異なる生き方や背景をもつ人々と一緒に新しい教会を形成していくのです。忍耐、労り、信仰を必要とします。聖霊の助けを受けて主の教会形成の使命を果たさせていただくのです。

「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」(使徒言行録一・八)

ペンテコステの出来事が教会に天からのいのちを満たしてくださった事実を思い起こしながら、祈りたいと思います。

【祈 祷】

今日、あなたは私たちを召し、訓練し、あなたの教会に送り出そうとしてください。感謝いたします。あなたの憐れみと愛に支えられて、その貴い使命を果たすことができますようにお助けください。

私たちの周りを見渡す時、私たちの愛する家族の中に、また、教会員の中に、また、地域の中に心傷つき、不安と恐れをもつ人たちがいます。どうか、その人たちに主の癒しをお伝えできるように知恵をお与えください。

主なるあなたに目を向ける時、あなたの優しい眼差しに癒されます。私たちの兄弟姉妹の痛みや苦しみを、あなたが癒そうとしていく。ださる愛に希望を与えられます。どうか、私たちを造りかえて、私たちの兄弟姉妹の痛みを聴き取る心とそれに寄り添う勇氣と、あなたの愛を語る知恵と愛をお与えください。

あなたの前にへりくだり、熱心に学び、ひたすら、あなたに誠実に従う生き方をさせてください。大胆にあなたに近づき、あなたの愛の深さを知り、伝えることができますように。

私たち一同の上に、主の慰めと励ましが豊かにありますようにと祈ります。主イエスが流してくださいました十字架の血潮を仰ぎ見つつ、日々の生活を感謝と喜びの内に過ごさせてくださるようにと祈ります。主のみ名によって祈ります。

アーメン。

(二〇一〇年六月一日東京神学大学での講演原稿に加筆訂正を加えたものである)

注

- (1) マタイによる福音書九・三六 「群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」。人々が生きる目的もなく、苦しみの中にいるのを見てイエスは心を痛めたとある。「弱り果て、打ちひしがれている」状態は、今日の社会状況を映し出している。
- (2) Deacon 執事、食事担当の執事職 (deaconate)
- (3) ここにある七人の人たちの名前はギリシャ風の名前である。社会的に底辺で生きた人たち、抑圧を受けていた階級の人たちである。
- (4) このことは、ステファノが最初の殉教者となったことで明らかである。ステファノは神のために生命を賭けて働いた人物である。「ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立つておられるイエスとを見て、『天が開いて、人の子が神の右に立つておられるのが見える』と言った。……ステファノは主に呼びかけて、『主イエスよ、わたしの霊をお受けください』と言った。それから、ひざまずいて、『主よ、この罪を彼らに負わせないでください』と大声で叫んだ」(使徒言行録七・五五―五六、五九―六〇) に彼の生き方が示されている。使徒言行録七・二―五三が彼の説教。
- (5) コリントの信徒への手紙Ⅰ 一・二―二二―三〇。特に「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つである」(二二・一二)
- (6) コリントの信徒への手紙Ⅰ 一三・一―一三。特に「山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。……愛がなければ、わたしに何の益もない。」(一三・二、三)。ヤコブの手紙一・二七「みなしごや、やもめが困っているときに世話をし、世の汚れに染まらないように自分を守ること、これこそ父である神の御前に清く汚れない信心です。」
- (7) コリント人への手紙Ⅰ 一・二六
- (8) 霊的いのち、生物的いのち、精神的いのち、社会的いのちを支える。
- (9) 『広辞苑』(第六版)によると「知識」と「知恵」を次のように定義している。「知識」―ある事項について知っていること、また、その内容。哲学 knowledge, wissen 知っている内容。認識によって得られる成果。厳密な意味では原理

- 的、統一的に組織づけられた客観的妥当性を要求し得る命題の体系。「知恵」―物事の理を悟り、適切に処理する能力。哲学 (Sophia, wisdom) 古代ギリシヤ以来さまざまな意味を与えられているが今日では一般に人生の指針となるような人格と深く結びついている哲学的知識をいう。この広辞苑の説明を言い換えれば、「知識」とは、原理、統一的に組織に立った客感性のあるもの。それに対して、「知恵」は原理を悟りつつ、状況、相手の事情を考慮しつつ最善を計る心と言え。 「知恵」には人格的触れ合いが大きく働く。
- (10) コリントの信徒への手紙Ⅱ 一・八一―一〇、フィリピの信徒への手紙二・六一―九
- (11) モデル model とは、「型、模型、雛形、模範」とある。牧師の働きは複合的で、説教者、預言者、教師などが含まれる。それぞれが目的、本質、特徴を異にしている。牧師の役割りを「モデル」という形で考えることで、その目的、本質、特徴を際立たせることができる。
- (12) 1 宣教者モデル (パウロ)、2 預言者のモデル (アブラハム)、3 十字架モデル、復活モデル
- (13) ウィリアム・ウイリモン、越川弘英、坂本清音訳『牧師―その神学と実践』新教出版社、二〇〇七年 (William H. Willimon, *Pastor: The Theology and Practice of Ordained Ministry*, Abingdon Press, 2002)。ウイリモンは、一九四六年五月一日生まれ。イエール大学神学部、エモリー大学大学院で学ぶ。デューク大学の神学部長、米国の合同メソジスト教会監督などをし、著名な神学者であり、説教家でもある。
- (14) 例えば、H・リチャード・ニーバーが語ったという牧師職の議論には、常に牧師の機能の目的は何か、牧師の召命と何か、牧師の権威の源泉は何か、そして、牧師は誰のために奉仕するのかという四点にあると指摘します。
- (15) Identity―人格における存在証明、また、同一性。ある人が一個の人格として時間的、空間的に一貫して存在している認識をもち、それが他者や共同体からも認められていること。自己同一性。ある人や組織がもっている他者から区別される独自の性質や特徴 (『広辞苑』第六版)。
- (16) 召命観、使命感の明確化の必要性が語られてきた (原点を想起する、救いの体験を感謝する)。
- (17) 召命感、使命感には、神様の一方的働きに対しての応答が強調されている。しかし、この応答のみが強調されて、自分の中の弱さや歪みのあることが無視されてしまうので、牧会の現場に出たときに、教会員との人間関係のトラブルで行き詰まってしまう。

- (18) 平山正実「死と向き合う」『牧会ジャーナル』二〇一〇年三月一日発行、三頁。
- (19) マタイによる福音書六・二六「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる」。ここでは神様の絶大な恵みも小さな者にも注がれていることが語られている。
- (20) ヤコブの手紙一・一九「だれでも聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい」
- (21) ローマ人への手紙八章